HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第３章　現代におけるアイヌ差別
Author(s)	佐々木, 千夏
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 35, 45-70
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61393
Type	bulletin (article)
File Information	300_ch3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第３章　現代におけるアイヌ差別

佐々木千夏　旭川大学短期大学部助教

はじめに

本章では、道内の５つの地域で行われたアイヌの血筋である人々へのインタビュー調査と、地域住民へのインタビュー調査の結果を手がかりに、アイヌの人々をめぐる民族差別および民族内差別について、地域、世代、ジェンダーを視点に検討していく。

第１節では、札幌市およびむかわ町の調査報告（菊地 2012）、以下同様に、新ひだか町（菊地 2013）、伊達市（菊地 2014）、白糠町（佐々木 2015）のそれぞれにおいてアイヌ差別を分析した内容を総括し、被差別経験率について量的に把握する。次に、被差別経験の具体的な内容やきっかけ――学校における差別、恋愛・結婚における差別、就職・職場における差別、その他のエピソード――について分析を加える（第２節）。ここまでが、和人からアイヌ民族への差別を主とした「民族差別」にかかわる検討である。その後、アイヌ民族内部の人間関係の葛藤に注目した「民族内差別」の検討を行う（第３節）。そして最後に、本章のまとめと考察をする（第４節）。

第１節　被差別経験率の量的把握

本節で見る被差別経験とは、インタビューにおいて「これまでの暮らしの中で、アイヌであることを理由にいじめや差別を受けた経験はありますか」という質問に対し、肯定的な回答をした場合を被差別経験「あり」としたものである[1)]。それぞれの調査には、対象者数や世代ごとの割合に微妙な違いはあるものの、世代別とジェンダー別に被差別経験率をまとめたものが図３－１と図３－２である。以下では、世代、ジェンダー、地域の順でそれぞれの特徴を検討してみよう。

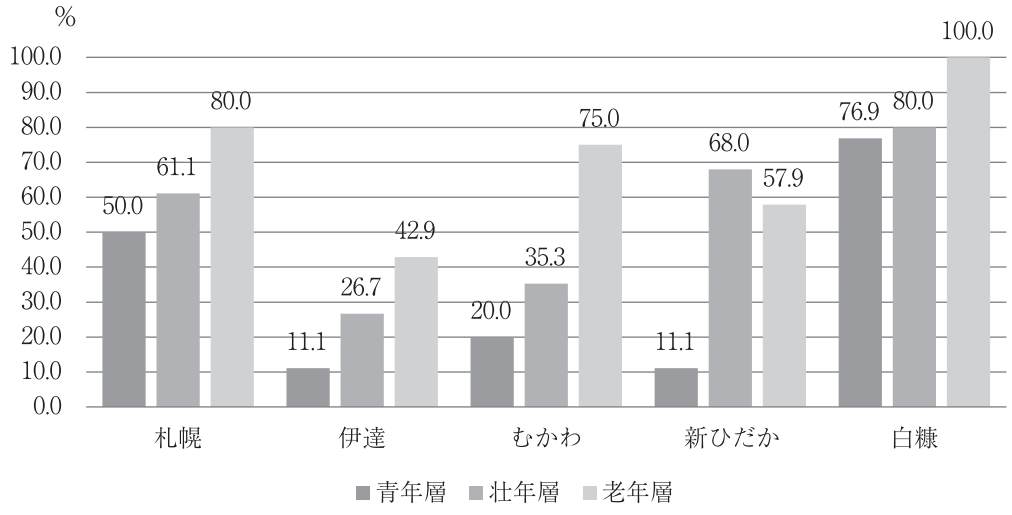

図３－１　地域別世代別被差別経験率

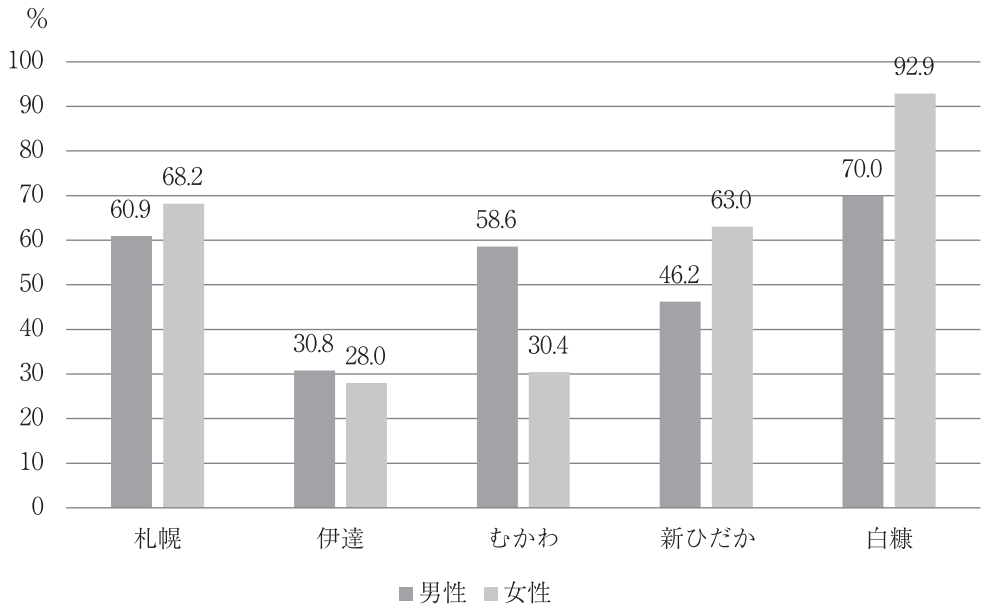

図３－２　地域別男女別被差別経験率

図３－１より、新ひだか町以外の４つの地域は、より若い世代になるにつれて被差別経験率が減少していることがわかる。新ひだか町においても、壮年層と老年層の数値は逆転しているものの、大きな差ではない。こうした傾向から、現代において、基本的には若い世代におけるアイヌ差別は減少してきており、今後もますますアイヌ民族への差別意識は社会的に弱まっていくのではないかと予想できる。

続いて図３－２を見ると、５つのうち３つの地域において、男性よりも女性のほうが、被差別経験率が高いことがわかる。女性の被差別が上回っている札幌市、新ひだか町、白糠町では、どこも過半数の女性たちが被差別経験を持っている。これまでの分析では、アイヌ差別の典型である「体毛の濃さ」への指摘がどちらかといえばアイヌ男性よりもアイヌ女性にとって深刻な悩みであること、結婚の際に、アイヌ男性は和人の相手（やその家族）から結婚を渋られるケースがないわけではないものの、アイヌ女性の場合、和人からもアイヌ男性からも避けられる事例があったことなどを根拠に、アイヌ男性よりもアイヌ女性のほうが概して差別されやすいと解釈してきた（菊地 2012，2013，佐々木 2015）。しかし、男女ともに被差別経験率が低い伊達市ではあまり性別による違いがないこと、むかわ町では女性よりむしろ男性のほうが多くの被差別経験を有していることを視野に入れる必要はあるだろう。

では、なぜこうした地域差が生じてしまうのか。

いま一度、図３－１、図３－２を見比べると、地域ごとの被差別経験率にはかなりの開きがある。たとえば、白糠町ではどの世代も男女どちらも差別されたことがある人が多く、過半数に達しており、老年層に至っては全員が被差別経験の持ち主となっている。一方、伊達市では差別されたことがあるという人が少なく、老年層でも半数に届かない。この点に関して、極端に被差別エピソードの少ない伊達市においては、大黒（1997, 1998）の知見を参考にしてきた（菊地 2014）。曰く、「伊達市の歴史には、アイヌ民族と和人との激しい衝突や抗争が見られない。・・・（中略）・・・記録

を見る限り、おおむね平和的であったようである」というものであった。

また一般的に、偏見や差別の認知度は、アイヌの人口比率が高いほど小さいという研究結果も存在しており（松本・石郷岡・太田 1995）、この知見と本調査を照らしてみると、アイヌ集住地域としての伊達市、むかわ町、新ひだか町よりも、集住地域とはいえない札幌市のほうが相対的に高い被差別経験率であることは妥当な結果といえる。これまでの分析では、札幌調査において、クラスの中でアイヌの割合が圧倒的少数となるため、学校等でいじめのターゲットになりやすいという解釈をしてきた（菊地 2012）。しかしここで注意すべきは、アイヌ集住地域でもアイヌへの差別がないわけではなく、むしろ、アイヌの伝統や知識が地域に根付いているがために、「あ、犬（イヌ）」といった古くから言われるからかいの言葉が上の世代から引き継がれていたり、アイヌ語としてなじみのある「メノコ」（アイヌ女子の意。蔑称として用いられやすい）、「アイヌねぎ」、「魚臭い」といった言葉が差別的な意味合いで発せられやすかったりする面が見出されてきた（菊地 2012）。本稿では、それぞれの地域の特徴をより浮き彫りにするため、次節にて、地域にまつわる被差別エピソードにも注目する。

以上、被差別経験率を用いた量的な把握としては、若い世代ほどアイヌ差別は弱まっていること、アイヌ男性よりアイヌ女性のほうが差別の風当たりがより強い傾向にあること、地域によってアイヌ差別の強弱は様々であり、そこには地域の歴史やアイヌの人々の割合の影響が大きいということがいえる。世代の移り変わりによってあからさまな差別は減少しているとはいえ、完全に消失していない以上、アイヌの人々が過去にどのような苦しみを経験してきたのか、また、現在においても、どのような不利益・不公平が残存しているのかを明らかにするために、以下では対象者のインタビュー内容に注目した分析に移る。

第２節　被差別エピソードの内容分析

従来の調査報告では、被差別エピソードが語られやすい場面として、学校でのいじめや差別、恋愛や結婚時に顕在化する差別、就職時や職場での差別が指摘されてきた（野崎 2012; 小野寺 2012; 佐々木 2015 ほか）。本節ではこれらをふまえ、まず、この３つの場面に分類して被差別エピソードを量的に集約してみたい。

第１項　被差別の場所やきっかけに関する量的把握

図３－３、表３－１から確認できるように、どの地域でも群を抜いて多いエピソードは「学校」で生じるいじめや差別である（５地域合計 106 件）。ここには小学校・中学校・高等学校・大学在学時におけるエピソードが含まれるけれども、ほぼ、義務教育期に当たる小・中学校のものといってよい。小学生となって集団生活に入り、初めて「アイヌ」への差別を経験し、その経験が「アイヌであること」の自認につながったという例も少なくない。

次に多いのは、５地域合計でいうと 37 件の「結婚・恋愛」の場面における差別である。結婚する段階になってアイヌであることを理由に断られたり、家族の反対にあったりする事例が典型である。また、結婚時のエピソードより数は少ないが、恋愛の際に相手から民族性を考慮されたという事例もある[2)]。

そして、数としてはあまり多くはないが、「就職・職場」における差別がある（総計 20 件）。む

かわ町では０件と、該当のない地域も含まれている。学卒後、社会に出てからのアイヌ差別は起きにくいといえそうだが、西田・小内（2015）によれば、アイヌの人々はアイヌ民族に特有な仕事、つまり、アイヌの人々が多く働いていたり、アイヌの人々に好意的な経営者がいたりする会社などに就職することが多いという。その理由として、学生時代の差別の経験や、それゆえの学歴の低さも指摘されている。

最後に、どの地域にも、「その他」のエピソードが数件ずつ存在し総計 22 件となっている。この中には、地域名をあげて具体的な被差別エピソードとなっているものがいくつか共通しており、それ以外は、大まかにいえば日常の様々な生活場面における被差別経験である[3)]。とりわけ近年の被差別エピソードが多いため、「その他」もひとつの項を設けて以下で分析する。

図表の５つの地域を比較してみると、前節での被差別経験率の高さと同様に、被差別エピソードの総数でも白糠町（50 件）が一番多くなっており、次いで札幌市（49 件）、新ひだか町（37 件）、むかわ町（33 件）、伊達市（16 件）の順である。白糠町と札幌市は僅差であることから、札幌市の場合、一個人が語る被差別エピソード数が比較的多いということになり、なかでも他の地域より、「就職・職場」にまつわるエピソード数の多さ（10 件）が目に付く。こうした地域差に加え、世代、ジェンダーをふたたび視点とし、以下、学校での差別（第２項）、恋愛や結婚における差別（第３項）、就職時や職場での差別（第４項）、その他の差別（第５項）の順でそれぞれの内容分析を進めたい。

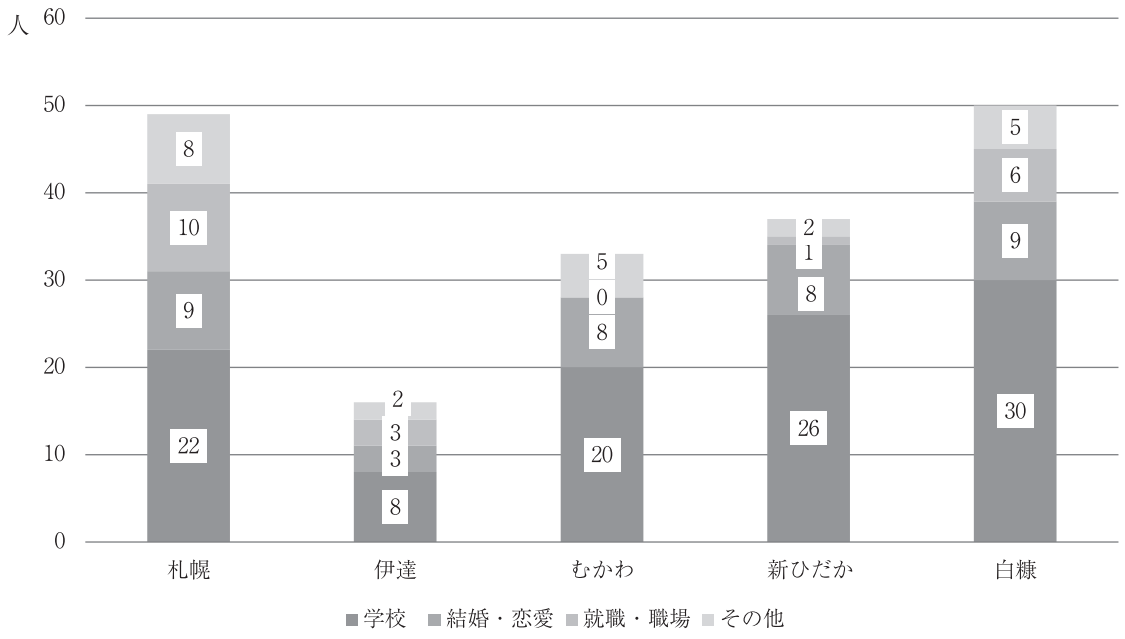

図３－３　地域別被差別経験の場・きっかけ（複数回答）

表３－１　地域別被差別経験の場・きっかけ（複数回答）

上段＝実数（人）、下段＝構成比（%）

	学校	結婚・恋愛	就職・職場	その他	N
札幌	22	9	10	8	49
	44.9	18.4	20.4	16.3	100.0
伊達	8	3	3	2	16
	50.0	18.8	18.8	12.5	100.0
むかわ	20	8	0	5	33
	60.6	24.2	0.0	15.2	100.0
新ひだか	26	8	1	2	37
	70.3	21.6	2.7	5.4	100.0
白糠	30	9	6	5	50
	60.0	18.0	12.0	10.0	100.0
計	106	37	20	26	189
	56.1	19.6	10.6	13.8	100.0

注．Nは被差別エピソードの総数。

第２項　学校での差別

はじめに、最も該当数の多い「学校での差別」を掘り下げていこう。

学校での被差別経験は、札幌市を除く４つの地域で被差別経験全体の半分かそれ以上を占める割合となっており、アイヌの人々が和人から受ける差別の中で最も語られやすいものである。「あ、犬（イヌ）」といった言葉によるからかい、身体的特徴への指摘、根拠のない「臭い」といった言葉、もっと単純で包括的な、和人ではなくアイヌであることへの民族差別…。

その被差別経験は学校生活を変化させていく。差別やいじめを苦に、登校を行き渋ったり、不登校になったりしたという事例がある。

・「小学校から中学校、社会に出てもやっぱり「アイヌ」、「アイヌでしょ」みたいなことは言われました。今はもう別に気にしてないですけど。（中略）（みんなにいじめられて登校拒否にはならなかった？）なりました。行かなかったです、学校。ほぼ行ってなくて。（中学も？）中学は中１までは行ったんですけど、あとはグレました」（伊達・青年・女性）

・「（小学校時代）学校へ行くのがつらい時は、アイヌ同士で学校をサボり、学校が終わる時間まで魚釣りや竹を採って何かを作って遊んだりしていた。小学校２年生まではアイヌも和人も関係なく遊んでいたが、小学校３年生以降は一緒に遊ぶことはなくなった」（むかわ・老年・男性）

・「（小学校時代、静内町にて）アイヌは貧しいし、学校ではいじめられるので、学校に行けない子がいっぱいいた。学校へ行けない子が多いから、クラスの中でもアイヌは少ない。つらいことがあっても話せる人がいなかった。学校へ行きたくないけれど、親に行けと言われ、行かなければならないと思うから行った」（札幌・老年・女性）

・「（小学校時代、旭川市にて）クラスにアイヌは女子が１人か２人で、男子を入れても３人から４人くらいという感じだったと思う。高学年くらいになってくると、みんなも言葉を覚えるので男子からも女子からも「きたない」とか「あ、イヌ来た」とか言われたり、無視されたりした。同級生の他のアイヌの子も同じようにいじめられていた。だからみんなで孤立して隅っこに立っていた。先生は助けてくれるけれどいつも一緒にいるわけではないので目が届かなかった。それで学校が嫌いで行きたくないといって母親を困らせた。無理やり手を引っ張られて学校へ連れて行

かれたこともあった」（札幌・老年・女性）

やはり被差別経験率の高い老年層のエピソードが目立つ。現代では混血が進み、アイヌであるかどうかを判別しにくくなっているため、差別が起きにくくなっているという面もあるが、自らアイヌであることを隠すことでいじめや差別が起こらないようにしてきたという事例もある。以下、青年層、壮年層から語られたエピソードである。

・「小学生の頃、祖母に踊りに連れて行かれたことで、注目の的になるのがとても嫌だった。中学のとき、ふざけ半分でアイヌをからかわれたり、いじめられたりしている人を見て、自分がアイヌの家族だとばれたくないと思った。これらのことがトラウマとなっていて、今でもアイヌの人とかかわるのが嫌だ」（むかわ・青年・女性）
・「学生時代、自分がアイヌだという意識があり、それが嫌で自分がアイヌであることは口にしなかった。そのことがまた嫌だったが、アイヌであることはできるだけ隠そうとしていた。高校の時に、いとこがアイヌの姓だったため、そのいとこのことを「自分のいとこだ」と堂々と言うことができなかったのが辛かった。いとこはアイヌであると公言しなくても地元の人には名字でわかってしまう」（新ひだか・青年・女性）
・「一般の人の中では（アイヌであると）言わないように。言うと差別っていうのを小さい時から見てきてるんで、母親もそれで苦労して育ってるもんで、母親の遺言が大きくなって結婚する時は、ウタリじゃなくて普通の人と結婚しなさいよって、よく（母親は）小さい時いじめられたんで、そう私に言い聞かせてたもんで」（新ひだか・壮年・女性）

１人目と２人目の青年女性は、アイヌであることを隠し続けた結果、学校に限らず、これまでの生活の中で被差別経験は「ない」と回答している。また、３人目の壮年女性も、小学校時代に馬鹿にされたことがあると言いつつも、「自分から墓穴掘らないように、要領よく」学生生活を送ってきたと振り返る。３名とも女性であることは、偶然ではないだろう。３人目の女性は母親からアイヌではなく和人と結婚するように伝授されてもいるが、このようにアイヌの血を薄める戦略を持っているのも、女性たちに多い。つまり、男性より女性のほうが、巧みにアイヌであることを隠蔽し、「要領よく」人間関係を保持したり、学校生活も切り抜けたりする傾向にあるのではないか。

ところで、マイナスの学校経験が色濃くなると、進学にも影響が及んでくる。実際、アイヌの人々は和人と比べ、学歴達成が低いことが明らかにされている（野崎 2012）。以下の事例には、学校でのいじめや差別が、進学意欲の低下を引き起こしていることがうかがえる。

・「（学校で）喧嘩して、その子が泣いて教員室に逃げて行ったら、次の日先生に呼ばれていったらね。「何でお前やった」って「アイヌ、アイヌって馬鹿にするからだ」ってったら、「お前、アイヌだべ」ってこうだからね、先生がね。アイヌがアイヌって言われて何悪いんだって味方するからね。まあ不公平だったよね、昔はね。（もっと上の学校に進学したかったとかは？）差別が多いからね、学校（高校）は行きたくない。１日でも早く終わって欲しかったからね」（新ひだか・老年・男性）
・「昔は先生に竹でたたかれて。勉強できなければ今度親にたたかれる。家に帰れば親にたたかれ、

学校へ行けば先生にたたかれる。私が10歳のとき、もう奉公に出てるの。昔の奉公。もう学校へ行って、いじめられていじめられて、どうしようもないものだから。１回いじめられたら死ぬまで忘れられないわね」（新ひだか・老年・男性）

・「中学卒業後は、愛知県の紡績工場に集団就職した。高校へ進みたいという思いはなかった。これまでの学校生活はいじめなどがあってあまり楽しいものではなく、同じように嫌な思いをするなら母の助けになるように働きたかった」（白糠・壮年・女性）

１人目と２人目の男性の事例は、教員からの差別であったことがわかる。子どもの間で起きるいじめや差別以上に、教員から差別的な扱いをされた場合、より進学意欲を失う傾向にあるといえるのではないだろうか。

結果として、アイヌの人々は相対的に低い学歴達成とならざるをえない。以下表３－２は、インタビュー対象者となったアイヌの人々の最終学歴をまとめたものである。

表３－２　インタビュー調査対象者の最終学歴の分布

上段＝実数（人）、下段＝構成比（%）

	小学校	中学校	高等学校	高等専修学校・他	短大・専門・高専	大学	大学院	N
札幌	4	14	12	3	9	3	0	45
	8.9	31.1	26.7	6.7	20.0	6.7	0.0	100.0
伊達	1	12	19	4	1	1	0	38
	2.6	31.6	50.0	10.5	2.6	2.6	0.0	100.0
むかわ	3	28	11	4	3	3	0	52
	5.8	30.2	21.2	7.7	5.8	5.8	0.0	100.0
新ひだか	6	16	19	5	5	2	0	53
	11.3	30.2	35.8	9.4	9.4	3.8	0.0	100.0
白糠	4	21	11	2	0	0	0	38
	10.5	55.3	28.9	5.3	0.0	0.0	0.0	100.0
計	18	91	72	18	18	9	0	226
	8.0	40.3	31.8	8.0	8.0	4.0	0.0	100.0

注）１．各学歴には中退を含んでいない。
２．「高等専修学校・他」は、中卒後、１～４年制の専修学校に進んだ場合や、各種学校、職業訓練校に進学した場合を含む。
３．「短大・専門・高専」は少なくとも高等学校卒業以上の学歴を得たうえでの進学を指す。

1974年以降、日本の高校進学率が90%を越えているなか、アイヌの人々の高等学校以上の進学率（「高等学校」、「短大・専門・高専」、「大学」を最終学歴とする割合の計）は５地域全体で43.8%、地域別では高い順から伊達市55.2%、札幌市53.4%、新ひだか町49.0%、むかわ町32.8%、白糠町28.9%となっている。上位の伊達市、札幌市でもおよそ２人に１人しか高校に進学していないことになる。都市である札幌市の特徴として、高卒後、短大や大学等に進む割合が２割を超えており、他の地域の１割前後からはやや飛びぬけている。一方、最も下位の白糠町の場合、高等教育を受けた者は１人も存在せず、全体的な学歴の低さが際立っている。他の地域よりも著しく低いのは、白糠町において被差別経験率が最も高かったこととも無関係ではないのではないだろうか。学校での被差別経験がその後の進学か就職かという進路選択にある程度の影響を持ち、アイヌの人々のライフ･チャンスを狭めているとすると、学校でのアイヌ差別が珍しくもない現実は重大な問題であろう。

第３項　恋愛・結婚の場面での差別

続いて、恋愛や結婚の場面での被差別経験に注目してみたい。これまで、各地域の調査報告でも恋愛や結婚の被差別エピソードは数多く紹介してきたので、本稿では差別によって恋愛や結婚が破談となった事例、反対に逆らって無理やり結婚した事例、結婚後、離婚することになった事例に着目したうえで、以下、分析を進める。

３つの視点で被差別エピソードをまとめたものが表３－３である。

表３－３　恋愛や結婚に影響した被差別エピソード

恋愛・結婚が破談となった事例	a）「20歳を過ぎた頃に17歳か18歳くらいの青森出身の女性と1年半くらいつきあったことがあった。ある日「あなたともうつき合えません。○○○人だから」と書かれた手紙をもらった。最初は○○○人と書いてあっても何のことかわからなかった。しばらく考えてアイヌ人だからつきあえないということだとわかった。その時、「アイヌはシャモとつきあってはだめなのか」というシャモに対する怒りがこみ上げて来た。その後もそういう差別を2〜3回くらい体験した。30歳くらいのときにも付き合った人がいて、結婚話になった。相手が身辺調査をしたようで、アイヌだからだめだということだった」（新ひだか・壮年・男性） b）「22歳の時に結婚しようと決めた人がいたのだが、その人に「アイヌは結婚したら、歳を取るのが早いんだよ」と言われて、それが差別だと考えたら顔を見るもの嫌になって、結婚を断ってしまった」（札幌・老年・女性） c）「7年間ほど付き合って結婚を考えていた彼女の両親に物凄く反対されていて、電話越しに彼女の両親が「アイヌだからだめだ」と話しているのを聞いてしまい、かなりショックを受けた。それまでは色々な事を言われても気にしなかったが、この時は「なんで自分はアイヌで生まれたんだろう」と思った。彼女は、「そんなこと関係ない」と言ってくれたが、ずるずると引きずってしまい、10年間付き合ってから別れてしまった」（白糠・青年・男性） d）「結婚はしていなく、ずっと独身。結婚したいと思う人がいたが、相手の家族に反対された。「家族に反対された」と相手の人が言ってきたときに怖気づいたと思って見限った」（白糠・老年・女性）
無理やり結婚した事例	e）「付き合って結婚しようと思ったら、「アイヌだから駄目だ」と向こうの親が反対した。（職場の）工場長が「彼なら大丈夫」と言ってくれたが、今度は「工場長まで訴えてやる」と大騒ぎになった。「絶対駄目」ということだった。（略）孫ができたらだんだん許してもらえるという格好になった。そこに至るまで、一緒に住みだしてから3年かかった。付き合いだしてからだと、5年くらいになる」（むかわ・老年・男性） f）「妻（和人）の父親が、アイヌであることで大反対した。妻の父親は公務員で生活も安定しているから、なぜ手彫りをしているアイヌと一緒にならなければならないのかということだった。しかし反対していたのは父親だけだったので、妻の親戚の叔母さんや兄弟が駆け落ちするように結婚するのを手助けしてくれた」（札幌・老年・男性） g）「結婚に際し、「何が悲しくてアイヌと結婚するんだ」と両親をはじめ、親戚一同に反対された。母は涙も流したが、反対を押し切り無理やり結婚した」（白糠・壮年・和人女性） h）「長男が和人と恋愛して結婚したとき、向こうの親にアイヌだから結婚式をやらないでほしいと言われた。長男の妻になる娘が子どもを妊娠し、本人たちはどうしても一緒になりたいと言うので、（長男の親として）3回ほど娘さんをもらいにいった。それだけ言うなら仕方ないということで、結婚式は一切してはならないという条件で、籍を入れることだけ許された」（むかわ・老年・男性）
離婚に至った事例	i）「夫の親もきょうだいも、一つ一つの場面で民族の違いということを言い、夫もそれに同調していた。「北海道のアイヌで何が悪い」と言うと、「アイヌ同士は愛情が深すぎる」と言われ、「愛情が深いのがだめなの。やさしさを出してはいけないの」と言ったら、「アイヌってそうだものね」、「やっぱりアイヌには理解できないんだ」という言葉が出てくる。昔小さい頃に自分が馬鹿にされたことを夫には理解してもらえると思い、少しずつでも理解して助けてくれると思っていたのが、夫からそう言われると耐えられなくなった。夫の実家からはしまいには「あなたの親、きょうだいを一歩たりともうちの玄関から入れないで」と言われた。耐えられなくなり離婚した」（札幌・壮年・女性） j）「長男が生まれたとき、姑が病院に来て、「うちの孫ではない」と言われた。夫（和人）にも「俺の子ではない」、「子は産むな」、「子どもは要らない」と言われた。（対象者の）心は冷えてしまい、3人目が生まれた25歳のとき夫と別れた。9年間夫婦生活を営み、家も建てていたが、全部捨てることにした」（札幌・老年・女性） k）「喧嘩しているうちに、メノコって言われたの。一回も言われたことない言葉なのに（略）。それが今度癖みたいになって、合計4回言われたんだよね。これはだめだと、年取ったら、もっとひどくなるだろう、この人は。（ということで離婚した）」（白糠・老年・女性）

まず、恋愛や結婚がうまくいかなくなってしまった事例（a、b、c、d）のうち、インタビュー当時、結果的に２人が独身であった（c、d）。最終的に結婚に至っていても、「○○○人（アイヌという言葉が入る）だから」交際はできないという手紙をもらったり、その後、別の人からも身辺調査をされて結婚が破談になったりしたという男性の場合（a）、恋愛・結婚の際に、アイヌであることが支

障であったといわざるをえないだろう。過去の調査報告では、一度、アイヌであることを指摘されたことでその後の恋愛や結婚に臆病になってしまう事例や、面倒を起こしたくないのであえて恋愛や結婚時にもアイヌであることを伝えないという事例もあった（菊地 2012, 2014 ほか）。

そして、２人の気持ちを優先して結婚を強行しようとすると、和人側の家族や親戚からの反対にあうことは多い（e、f、g、h）。「訴えてやる」とまで言われた事例（e）や、「駆け落ち」という事例（f）など、内実は想像以上に壮絶である。

こうしたアイヌとの結婚を避けたい気持ちに関しては、和人の意識からも把握しやすい。以下は、各地の住民へのインタビューから得られたものであり、とくに新ひだか調査、白糠調査において顕著であった（菊地 2013, 佐々木 2015）。

・「結婚だけは。親も結婚は、アイヌはやめたほうがいいんじゃないかなと言ったかもしれないし、言ってないかな…はっきりしていない。でも俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないで付き合っていたら一緒になったかもしれないけど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった。友達づきあいはしますよ」（和人／新ひだか・老年・男性）
・「死んだ親父に「メノコでもいいから再婚するように」と言われた。「メノコでもいいから」、差別的なことだよね。心の中で冗談じゃないよと言っていたね。すごい差別しているね。潜在的だな。それは。さっきの設問で仲良くしていましたというけれど、普通に仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、親父にそう言われても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよね」（和人／新ひだか・老年・男性）
・「僕の姪っ子が結婚した血筋にアイヌの人がいて結婚すると聞いた時に、「誰と？」と、頭によぎるのがそれなんだよね。きっと僕らの年代ですよ、今の人はどうかわからないけど。それはきっと、だからって反対とかどうのこうのではなくて、頭の中に１番それが気になる部分。でもそれは口に出して「本家筋はアイヌだろう」とかそこまで露骨に言うことはないと思うけど、どこかでみんな我々の年代以上の人たちはとくにそれを感じるのかもわからないですね」（和人／白糠・老年・男性）
・「（娘の結婚という文脈の中で）わが事として考えたらどうなんだろう。やっぱり美しいことは言っていられないんじゃないかね。なぜなんだろうっていうことは言うかもしれないよね。でも徹底的に反対はもうどうしようもないと思うよね。最後は許すと思うけど、やっぱり紆余曲折はあるんじゃないかなという気はするよね。冷静に物は見れないかもしれない」（和人／白糠・老年・男性）
・「やっぱり、そんなこと言ったら悪いんだけども、ああ、ちょっと違うかなっていうのはありますよね。でも、やっぱりそういうことを口に出しちゃいけないと思うんで。…息子がもしお嫁さんにそういう人を選ぶんだったら、でも、息子が選んだんだったら反対しない、でも、子どもにやっぱり出るっていうのがあるから、ひょっとしたら反対する…ちょっと、ちょっとは言うかもしれないですね。一度くらい。ちょっと言って聞かせる。それでもしたいって言うんだったら、もうそれは本人の人生だから、最終的には本人の意志だからね、本人に任せるしかないんでしょうけ

れども」（和人／白糠・老年・女性）

５名とも、自らの発言が差別的であるという自覚を醸し出しつつも、できればアイヌの人との結婚を避けたいという思いを共通して語っている。すべて老年層であることから、やはり年長世代のほうがアイヌへの偏見が強いことを確認できる。ただ、このとき留意すべきは、語りの内容を見ると、５人中３人はわが子や親戚の子どもの結婚を心配しているという点である。つまり、世代交代によってアイヌへの結婚差別が単純に払拭されていくとは言いがたく、その潜在的な偏見や価値観は、今でも年長者から年少者へと伝わる現実がある。

また、５人中４人が男性であることも無視できない点である。アイヌ差別のなかでも、恋愛や結婚に関しては、アイヌ男性よりアイヌ女性のほうが下位に見られやすいのも否めない。

ふたたび表３－４に目を戻し、差別を理由として結果的に離婚となった事例（i、j、k）を見ると、すべてアイヌ女性によるものである。「「やっぱりアイヌには理解できないんだ」という言葉が出てくる」(i)、「喧嘩しているうちに、メノコって言われた」(k) というように、結婚生活の中で、男性より女性のほうが見下されやすいジェンダー規範が垣間見える。さらに出産したときに、「うちの孫ではない」、「子は産むな」といった子どもを媒介にした差別の事例（j）も、男性ではなく産んだ女性へと浴びせられる状況が確認できる。こうして見てくると、やはり恋愛・結婚におけるアイヌ差別は男性より女性のほうが深刻であるといわざるをえない。

第４項　就職・職場での差別

では、就職時や職場での差別に関しては、ジェンダー、世代、地域による差があるのだろうか。

前々項では、学卒後、進学か就職かという岐路に立ったとき、学校での差別経験が進学意欲を低下させる一因になっていることを確認した。本項では、就職や転職活動をしている時期と、実際に働き始めてからの職場での差別という２つの視点に沿い、被差別の内容を把握したい。

最初に、いわゆる就職活動期における差別である。こちらは実際に職場に入ってからの被差別よりは数が少なく、以下、女性２人がエピソードを語っている。

・「（これまで被差別は）１回だけ、中学校の先生が。就職を先生に、子どもだから「どこかないですか」ってお願いするじゃないですか。その時に、たった一言言われたの。それでカチンときたんですけど。私みたいな子どもに、「あなたアイヌ民族だから」（って言った）。だからどうなのってこと。「アイヌ民族だから自覚しろ」っていうことなのかわからないけど。「（アイヌ民族）だからね」っていうふうに言われたんですよね」（伊達・老年・女性）
・「一緒に阿寒で働いてた友達と面接受けに行ったらさ、私が落ちるんだよね。顔見たらあれでしょ？そういう差別は受けてきたけどね。（バイトで、面接を受けるときに？）面接行ったら、相手が受かって私がさ。そういう差別は私がアイヌだからかなーと思って。べつにそれをどうのこうの恨むわけじゃないけど、自分がそういう民族なんだからさ。差別されても仕方ないなーとは思ってるけどね」（白糠・老年・女性）

１人目は、就職活動期における教員からの差別である。彼女は学校で同級生からいじめられるこ

とも、恋愛・結婚時においても差別を受けることはなかったが、唯一「中学校の先生」からこうした差別を受けたと語る。教員は明言を避けているものの、「アイヌ民族だから」という言葉の背後には、就職は厳しい、もしくは就職を斡旋できない、というような含みが感じられる。

２人目の女性は、転職をする際、アイヌである自分は不採用となったという経験を語っている。彼女自身、「自分がそういう民族なんだから」「べつにそれをどうのこうの恨むわけじゃない」と楽観的ではあるけれども、アイヌ民族を理由に就職においても不利益をこうむっているという現実がわかる。

どちらも老年層の女性という共通点があるが、では、若い世代においてはどうか。

そもそも就職・職場における差別のエピソード自体が少ないため、新ひだか調査において、ある青年女性が語った内容を参照しよう。

彼女は、これまでに被差別経験はないという。しかし、「国や北海道に望むアイヌ政策は何か」という質問に対して、「働く場所や機会を提供し自立できるようにする」ことをあげている。

・「うちの妹が働いていた警備会社とかも、アイヌしか働いてないとかとみんなに言われていて、そういう人が集まる会社とかってあるんですけど、そういう人を「使って」いるのかどうか、選んでいるのかわからないんですけど。静内は結構あるんですよね。私も一番最初に働いたところの従業員がほとんどそうだったんです。（割烹料理屋さん。）そうですね。そういうふうに集まっちゃうのかなと思って、それは感じたことがあります。（そういう職場で分化されているというか？）分化されてるのかわからないですけど、○○というところだったんですけど、○○の社長からして（アイヌの血が）混ざってたから、みんな働きやすくていくのかわからないですけど、そういう会社というのはあるんですよね、従業員がアイヌだというのが多いところがあるから。もっと普通に、たとえば静内でいえばイオンとかにも働ければいいなと」（新ひだか・青年・女性）

彼女によれば、かつて働いていた職場は社長がアイヌの血筋であり、従業員もアイヌの人々が多かった。彼女の妹が働いていた会社も、「アイヌしか働いていない」、「そういう人が集まる会社ってある」と述べている。ここから、和人とは分離されたいわゆる“アイヌ労働市場”が存在しているといえるのかもしれない。西田・小内（2015）によればそれは「（アイヌの）民芸品店員」と「漁業・水産関係」が指摘されているが、「警備会社」や飲食店といった、一見、アイヌの歴史や伝統とはつながりのなさそうな職にまでその市場は及んでいる。こうした“アイヌ労働市場”にアイヌの人々が漠然と水路付けられているとするならば、その根底には和人との区別、つまり民族差別があるといえるのではないだろうか。

次に、実際に働き始めてからの職場における差別に注目したい。上記の就職・転職時における差別は女性のみからあげられているけれども、職場での差別には男性のエピソードも存在する。以下、ジェンダー別にそれらを整理した（表３－４）。

内容を見ると、学校や恋愛・結婚時の差別と比べて深刻な内容がそう多くはない。それはとりわけ、男性側によく表れている。たとえば、学校経験としてはいじめやからかいによって登校を躊躇するような場合や、現在でも学校での被差別が忘れられずトラウマになっているという事例があったが、社会人となってからはアイヌかどうかを問われ、不愉快に思う程度であったり（A、B、D、E）、直接言われるわけではないが「雰囲気で」の差別（F）といったものが主流である。「お前字

も書けないのか。アイヌだな」(C)といったあからさまな差別は少数派となっている。エスニシティは関係なく「仕事は腕で決まる」(G)というように、学生から社会人へと成長することによって、あからさまなものからふざけ程度のものまで、全体的に差別は影を潜めていくといえそうである。

女性の側に目を移すと、まず、被差別の場所がかなり“酒場”に偏っており、彼女らが「ホステス」、「スナック」の従業員をしている（た）ことの多さに驚く（J、K、L、M、P)。こうした女性に特有のいわゆる水商売系の職も、“アイヌ労働市場”の一種といえよう。その際、被差別の内容としてはアイヌであることを問われることが大半である。

表３－４「職場」における被差別エピソード

男性	A）「就職してから職場で「アイヌだろう？」と言ってくる人がいた。その人だけは嫌いだった。当時は差別が普通にあったから「アイヌだろう？」と言われるのは嫌だった」（札幌・壮年・自動車整備工） B）「部落差別はあったかもしれないが、アイヌについての差別はなかった。ただ単に毛深いとか彫が深いと言われ、どこ出身かをきかれることはあっても、アイヌだからどうこうということはなかった。しかし、大人しくしているとやられてしまうから、大阪でも東京でも札幌でも「馬鹿にしたら許さん」ということで喧嘩はよくした」（札幌・壮年・自衛隊） C）「夕張で働いてた25歳の頃に、小学校は1年生の3学期までしか行っていないので手紙が書けなくて、仲間に手紙を書いてと頼んだら「なんだ、お前字も書けないのか。アイヌだな」と言われた。「もう一回言ってみろ」と立ち上がったが、世の中字が書けなければだめなのだとハッとして思った」（札幌・老年・炭鉱夫） D）「現在ではお客さんと接しているときに「どこ（の）人だ？」と聞かれることがよくあり、そういったときにアイヌを意識する。「北海道人です」と答える。聞かれ方によってはちょっと不愉快なときもある」（札幌・老年・自営修理工） E）「船に乗ったら、いろいろ言われましたよ。・・・共同の浴場とかみんな一緒だし、極端な場合はお前アイヌかとかね、それがどうしたとかね。その頃はいい年ですからね。お前は毛がないじゃないか、とか言ってみたり」（新ひだか・壮年・漁師） F）「（仕事をする上で苦労したことは）若い時は上に年いってる人がいっぱいいるから、アイヌ民族の子どもだから多少はあったかもしれない。辛くというのではないけれど、目に見えないというのがあるでしょ、雰囲気で。はっきり言ってくれれば一番いいけれど。・・・話の分かる和人もいっぱいいたし、偏見を持っている人もいっぱいいたから」（伊達・老年・溶接工） G）「（これまで差別は）そうね、内地ではあったけど大した気にもしないから。反対にプライド持ってやってたから気にもしなかった。腕でおいでって言ったの。（腕で？）仕事は腕で決まるって言ったの」（伊達・老年・加工業）
女性	H）「アイヌということを理由に、同じパートの女性４、５人に工場でいじめられ無視された。相談できる人もいなかったが、両親が早くに死んだから自分で生きていかなきゃならないと思っていた」（札幌・壮年・乳業工場） I）「紡績工場時代は寮生活をしており、工場自体で女性が1000人と多くいたから、お風呂もとても大きかった。お風呂に入ると、毛深いことを指摘されることがあり、実際に「そんなに毛深いのなら、剃ったほうがいいんじゃないの？」という人もいたからそれが嫌だった」（札幌・壮年・紡績工場） J）「（東京で）床屋で働いていると毛は剃っていたしわからないと思ったけれど、お客さんからよく「どこ出身なの？」と聞かれた。「北海道」と答えると「アイヌ民族？」と言われるのが嫌で「沖縄」と答えていた。・・・（その後札幌にて）ホステスをしていたときもお客さんから出身を聞かれると沖縄と答えていた。「アイヌ民族だろう」と言われたこともあった。仕事をしていて辛かったのは、夜働いていたときにアイヌ民族と言われたことだった。嫌だし恥ずかしかった」（札幌・老年・理容師～ホステス） K）「スナックをしていたとき、客から「日高生まれか？」、「アイヌだろう」と言われたことがある。それに対して「私はアイヌだけどあなたはどこの人？」、「私はアイヌが先祖だとちゃんとわかっている。見下げるような言葉を使うな」などと言い返した」（札幌・老年・ホステス） L）「スナック（での仕事）では、「おまえアイヌだろ？」と言われたけれど、「アイヌで何が悪いの？」という感じで平気で言えた」（札幌・老年・ホステス） M）「ホステスをやっていたときに、足の毛を処理しなければならなかったり、お客さんからアイヌだと言われたりして、自分がアイヌであると強く意識することが度々あり嫌だった」（白糠・壮年・ホステス） N）「職場の人が結婚式を挙げることになって、そのハガキを回す役目をやっていたんですね。そうしたら発起人会で、私がハガキを回しているにもかかわらず、呼ばれていなかった。なぜ呼ばれないんだって、後輩に聞いたら「アイヌだから呼べない」って。そこまで差別するのかなって、あのときはびっくり」（白糠・壮年・バス会社） O）「店では酒を計ってコップで売っていたが、その注ぎ方を失敗すると、「お前、アイヌだろ」というように言われ、アイヌに対する冷たい扱いがあった。そのこともあり1年ほどで辞めている」（白糠・老年・雑貨屋） P）「子どもが生まれて生活が苦しかったため、スナックで働いていた。スナックでは、客に白糠出身だと言うと「したらお前アイヌだべ」と言われた。「あら、私アイヌに見える？」と訊いたら、「白糠の子はアイヌしかいないべや」と言われた」（白糠・老年・ホステス） Q）「（職安で働いていた頃）まわりが和人ばかりで、無知な職員がいた。アイヌの人たちはどうだった、昔はどうだったか、というくだらない質問ばかりされた。アイヌは日本人として変わりないということを説明した」（白糠・老年・ハローワーク）

酒場という雰囲気で、民族性を話題に出しやすい面もあるのかもしれない。ただし、男性と同じく女性たちもさほど深刻ではない。彼女たちのなかには学生時代の差別で鍛えられたと語る人もおり、「アイヌで何が悪いの？」（L）、「見下げるような言葉を使うな」（K）と言い返したり、「あら、私アイヌに見える？」（O）と冷静に対応したりする様子もうかがえる。ただ、アイヌと言われることよりも「沖縄」出身と偽っていたという事例（J）には、アイヌであることへの否定的なアイデンティティが見え隠れしている。唯一、アイヌであることを理由に職場の同僚の結婚式に自分だけ呼ばれなかったという事例（N）は、露骨な被差別エピソードであろう。こうした差別は、和人とアイヌの人々が混ざり合う職場だからこそ起こったと考えると、先に見た“アイヌ労働市場”が形成されている現実もうなずけるものがある。

以上、職場での差別は学校や恋愛・結婚時におけるそれよりも数が少なく、深刻なエピソードも多くはないというのが特徴としてある。ただしその理由として、就職の際にアイヌの人々が“アイヌ労働市場”に導かれているという面は否定できず、そうだとするならば、その背後にはアイヌ差別が横たわっていることを認めざるをえないだろう。

第５項　その他の差別――地域移動や日常生活のなかで

学校、恋愛や結婚、職場や就職の際の差別に分類できなかったものとして、１つ目に、「地域」に言及した被差別エピソードがあげられる。表３－５は、インタビューの中で地域名や集落の具体的な名前があげられた事例である。なお、５つの市町以外の地域名があがった場合にも、参考までに「その他」に掲載した。

むかわ調査では「α」（②）、新ひだか調査では「β」（⑥）、伊達調査では「γ」（⑦）や「ω」（⑧）と具体的な名称があげられているように[4)]、差別の記憶が語られるとき、各地域の中でも、場所によって差別が起きやすいところとそうではないところがあることがわかる。時には、「βに住んでるからアイヌなんだべ？」（⑥）と、地域名が蔑称のように用いられることすらある。

エピソードの中身を見ると、意外にも、５つの地域の中で最も被差別経験率の低い伊達調査（⑦⑧）の２人は、「はっきり（差別された）」、「ωは特にすごかった」と断言的である。量的には目立たない地域でも、個別の体験に注目すると鮮明な被差別経験を有する人はいる。

逆に、最も被差別経験率の高い白糠調査（⑨⑩⑪）からは、σ周辺でのエピソード、釧路から白糠に移ったときのエピソード、根室でのエピソードがそれぞれ語られている。つまり、白糠調査の被差別経験率の高さは、白糠町の内部ばかりではなく、道東を中心とした町周辺の市町での被差別経験者が含まれるという内実を持っている。いずれにしても、生活史で見たとき、地域移動は差別を感じるきっかけになりやすいといえる。「その他」にも数多くあげられているように、被差別エピソードの中に、地名があげられやすいのはその証左であろう。

表３－５ 「地域」に言及した被差別エピソード

むかわ	①「地域の中での和人からアイヌへの差別というのは存在していた。（略）本州から来た人々はこの地域を「部落」と呼ぶ。「あの部落の奴らは」という言い方をする。「部落」というのはアイヌではなく同和差別の用語であり、かなりの差別語であると感じる。もっとも、アイヌ自身が自分たちの集落を「部落」と呼んでもいるが、もともとはアイヌ民族ではない人々が使っていた「部落」という言葉がそのまま浸透していったのではないかと思う。」（老年・男性） ②「友達にはアイヌが多かったからいじめられることはなかった。αでお祭りがあり、αに行って汽車を降りたら「ほらアイヌが来た」とか「サルが来た」と言っていじめてくる。そういういじめがあったことで自分が「アイヌだ」と気づいたかもしれない」（老年・女性）
むかわ	③「（平取から）札幌に来るとき親戚のお兄さんが送ってくれたのだが、送ってくれたお兄さんを見て美容室の先生やその子どもが「アイヌが来たぞ」と騒いだ。みんなが見ていて、「アイヌだ」と指を指された記憶がある。（略）そのとき初めてアイヌはいじめられるという経験をした。」（壮年・女性） ④「小学校の時に、（対象者は）色白で母親に目の色が似ていて、人と違って少し茶色っぽいため、アイヌというよりもアメリカ人といわれて相当いじめられた。目の色が違うだけで「おまえはアメリカに帰れ。日本の学校に来るな。触るな、寄るな」と言われたのが悔しかった。静内でいじめられた記憶はないが、札幌でいじめられた。「3階から飛び降りろ」と言われたり、かばんを投げられたり、今で言えばすごいいじめだった。」（壮年・女性・なお、新ひだか調査対象者）
新ひだか	⑤「（子どもの頃に和人との付き合いに関して）あんまり喧嘩って言うのはないけども、やっぱりこう、町も下がれば、やっぱりアイヌは、軽蔑されたね。」（老年・男性） ⑥「いじめられたことも多少ありましたけど、別にすごいいじめではなかったんで、ただ言葉のね、「お前、βに住んでるからアイヌなんだべ？」ってみたいな感じで言われるくらいで、別にそれで学校行かなくなったりとか、そんなことは無かったですね。」（壮年・女性）
伊達	⑦「γの中学校へ行ったころからはもうね、はっきり（差別された）。γっちゅうのは仙台の人間。仙台。宮城県。あれほどね、人種差別する民族ないよ。」（老年・男性） ⑧「すごくやっぱりトラウマがすごかったので、アイヌとしての。（あまり伊達調査では差別の話は聞かないが、ご自身はそうではなかった？）すごかった。ωはとくにすごかった。私以外にもいじめられてる人いましたから。（でもアイヌの人数も多かった？）そうです。」（青年・女性）
白糠	⑨「（幼少期はσ周辺のアイヌ部落に在住。）σの同じ部落には普通の人、つまり和人もたくさんいた。彼らから毛深いことを馬鹿にされたことはあったような気がする。ただそれはそれですぐに仲直りはしていたが、ちょっとした喧嘩になると「アイヌ」という言葉がちょくちょく出てきていた。」（壮年・男性） ⑩「（中学1年の夏に、釧路から白糠に転居したところ、）「釧路からアイヌが引っ越してきた」と馬鹿にされた。白糠にもアイヌがたくさんいるし、釧路にいた時には小学校でも中学校でも一回もそんなふうに馬鹿にされた事や言われた事がなかったから驚いた。釧路では変なことを言われた事は一度もないし楽しい思いで学校に行っていたので、親にも「帰りたい」と泣きついた。白糠は田舎だから狭いのだと感じた。」（老年・女性） ⑪「根室の小学校では、いじめがあった。弱い子の味方をすると、「アイヌ！」などと言われた。当時は悪いことをしていないのに、どうしてそう言われるのか分からなかった。自分の周りにアイヌの血筋の家庭が１つもなかったこともあり、伝統文化をする人や、家庭内でもとくにそういったものはなかった。（その後、釧路方面に転校してからはいじめなし）」（老年・女性）
その他	⑫「（高卒後、群馬県にて就職）群馬では、アイヌについて話題も何にもなかった。風呂に入ると毛深いなと自分自身思っていた。でも、誰も別に何も言うこともなかった」（むかわ・壮年・男性） ⑬（旭川の小学校にて）「「きたない」とか「あ、犬来た」とか言われたり無視されたりした」→（中学校はσ方面に転校）「σの中学校へ入学したのは旭川の中学校ではいじめられるということが理由だったからと後から母に聞いた。Σではアイヌが多いのでのびのびできた」、「小学校時代の同級生は旭川の○○中学校へ入学し、ほとんどみんな登校拒否をするようになり町へ遊びに繰り出していた。学校でいじめられて行く所がないからみんな固まるしかなかった。水商売にも平気で就いていた。自分も旭川にいたらいじめられて、泣かされて同じようになっていたと思う」（札幌・老年・女性） ⑭（平取町ε出身の対象者）「平取町ζの小学校に転校した後、半年間はアイヌということでひどくいじめられた。「εに帰りたい」といつも言っていた。ζでは差別がすごく激しかった。現在でもなお、その時のいじめは鮮烈に覚えている」（札幌・壮年・女性） ⑮「（道内の小学校ではいじめがあった。就職で道外へ）自衛隊へ入って、向こうのほうへ行って暮らしてたら、もうそういう偏見、差別とかは全然感じないんだね、向こうの人はね。まあ自衛隊にいたら守衛に沖縄の人が多いんですよ。なぜか。そしたら、その人たちが僕を見て沖縄の人間だと思うんだね。そして、すごく親しく近寄ってくるのさ。「おたく、本土の人だろう」って来るのさ。「いや、本土だけど、本土違いの北海道だって」言って話したら、「ええっ」。○○（苗字）というのもやっぱり沖縄に多いらしいですよね。」（新ひだか・老年・男性） ⑯「（仕事で千葉在住の際、）やっぱり少しは差別された。仕事とかやっても少しは技術的に劣ると思ってるから、内地の人は。そういうので負けないように頑張ってた。だから内地行ってもほれ、ウタリっていう人がた居るからね、やっぱり何人か。」（伊達・老年・男性）

そして分類できなかったもののもう１つは、日常生活の中で起きる様々な場面での差別であり、以下のようなエピソードである。

・「４～５日前に札幌駅地下街のセルフサービスの喫茶店に１人で入り、コーヒーを飲んでいた。お皿を返しに行くときに、「あの人アイヌだよ」と喫茶店にいた２人連れの女性が言っているのが耳に入った。とても悔しくて、「あんたに何関係あるんですか」と言った」（札幌・老年・女性）
・「１つ目は、弟と２人で寿司屋に入ったとき、完全な差別を受けた。直接言葉をかけてきたわけではないが、従業員同士の話でそういった内容のことを話していることがわかった。２つ目は最近、弁当屋でのこと。出来立ての弁当ではなく、食中毒などが起こったときのために、ある一定期間保存しておかなければならないほうの弁当を売られた。その店は地元のアイヌの人々が多く住んでいる地域にあるので、当然、アイヌということを知っていたのだと思う。３つ目は、警察官からの差別がある。自分の話をちゃんと聞き入れてくれない。たとえば、道幅が狭くなるところで横から来た車に自分の車が押されたことがあった。ところが自分の主張は通らず、向こうが幅寄せしてきたのにこちらが幅寄せしたという言い方をされ、警察は向こうの言いなりであり、現場検証もしてくれなかった。相手も警察官も一緒になって差別的であった」（札幌･老年･男性）
・「成人になってから、半ズボンをはいたときに足が見えてしまい、遠くから指を指されて「あれ、見れ見れ」「アイヌだ、アイヌだ」と言われたことがある」（むかわ・壮年・男性）
・「病院に行くのも恥ずかしいんですよ。足が痛いと言ったって、結局はお風呂で毛を剃ってからきれいにしていかなければいけないし、病院に３カ月入院したって、その間にいっぱい毛が生えてくるのね。別にアイヌっていう血筋じゃなくて…、いやアイヌなんだわ、やっぱり、そこらへんはね。だから毛があるから、臭いとかそういう感じには絶対思わせたくないと思って。子どもたちにも普通の学校に入れてやりたいし、ばかにされたくないと思って、それでもばかにされるんだわ。それは、ずっとです。50 何年生きてきたけれど、今もパートに行っている職場にも絶対あります」（伊達・壮年・女性）
・「（身体に障害を持っているため）障害のことも含めて、住んでいた部落の大人たちには「お前だけはアイヌの子だろう」と言われ、アイヌというだけでよく思われていなかった。父親の周りの人たちからも当時は認められていなかった」（白糠・青年・女性）
・「仕事を続けてお金を貯めて家を建てた。家を建てた時に、アイヌ協会に入っていたので「女なのに家を建てられたのは、男をだまして金を取っているからだ」などと悪口を言われた」（白糠･老年・女性）

飲食店、病院等でアイヌであることを指摘された事例が目立つ。また、アイヌであることと障害を持っていることをあたかも関係があるように地域住民から見なされていたという事例や、本人の努力を見ようとせず、家を建てることができたのはアイヌ協会に入っているおかげだと、近隣から言われたという事例があった。このように、学校、結婚、就職の場に限らず、日常生活を送る中で思いがけず降りかかってくる差別はあるのであり、心を痛めている人はいまだに存在する。現代でも、アイヌへの偏見や差別的なまなざしが消失しているわけではないことを物語っている。

第３節　民族内差別の諸相

これまでのところでは、基本的に和人からアイヌの人々に対して起こる民族差別の実態を、地域、世代、ジェンダーを視点に検討してきた。民族差別は決してなくなっているわけではないが、時代を経るごとに混血が進んでいる現在、誰がアイヌかということが判断しにくくなっていたり、アイヌというエスニック・アイデンティティをポジティブに捉える若い世代が出現するなど、差別とはある意味逆の風潮があるのも事実である。この現実をふまえれば、今後、アイヌに対するあからさまな民族差別はますます影を潜めていくのではないかと考えられる。

そうしたなかで、アイヌ民族内部に見られる「民族内差別」に注目する意味がある。というのは、誰がアイヌかということは和人よりもアイヌの人々の間で認知されやすく、また、アイヌというエスニック・アイデンティティを抱え続けるのはいうまでもなくアイヌ自身である。それゆえ、アイヌについて知識があり、語ることのできる者たちがアイヌ社会の内側で互いに偏見をもったり、自分を卑下したりする状況が際立ちつつある（菊地 2013:48）。以下では、民族内差別の実態について、濱田（2012）が提示した７つのカテゴリーを参考に、５つの地域を総括して検討する。

濱田は民族内差別について、「階層的差異による差別」、「アイヌとしての血の濃さによる差別」、「和人に対する差別」、「アイヌ社会の閉鎖性」、「アイヌ性の隠蔽」、「アイヌに対する否定的イメージの付与」、「自己責任論」という７つのカテゴリーに分類する（濱田 2012:157-158）。７つのうち、前者４つは被害者の視点で、後者３つは加害者の側から語られがちであるというが、複合的な差別の場合、それぞれのカテゴリーに厳密に分けることは難しいという前提がある。

これらのカテゴリーを参考に、５つの地域における民族内差別のエピソードを抽出したところ、93 名のインタビュー対象者から、計 141 件のエピソードが把握できた。重複や曖昧な分類は避けられないものの、最も多いエピソードは「アイヌに対する否定的イメージの付与」（55 件）、２番目に「アイヌとしての血の濃さによる差別」（44 件）、３番目に「和人に対する差別」「アイヌ社会の閉鎖性」（それぞれ 13 件）であった。その他、少数が該当するものとして、「階層的差異による差別」（５件）、「アイヌ性の隠蔽」（７件）、「自己責任論」（６件）となっている。

地域別では、131 件のうち、多い順から札幌市（49 件）、むかわ町（36 件）、新ひだか町（23 件）、白糠町（21 件）、伊達市（７件）となっている。伊達市は民族差別と同様に、民族内差別の語りもごくわずかである。一方、札幌市やむかわ町の場合、他の地域よりも「アイヌ協会」に対する不満が述べられる中で、民族内差別と捉えられる語りが多くなっている。新ひだか町、白糠町、伊達市の場合、「アイヌ協会」に対する不満自体がかなり少ない。こうした理由により、地域によって民族内差別の語りの量には差が出ている。

以下では、はじめに「明確な差異化による差別」（第１項）として「階層的差異による差別」、「アイヌとしての血の濃さによる差別」、「和人に対する差別」、「アイヌ社会の閉鎖性」を検討する。その後、「アイヌ・アイデンティティの両面性に見られる差別」（第２項）として「アイヌ性の隠蔽」、「アイヌに対する否定的イメージの付与」、「自己責任論」に注目する。

第１項　明確な差異化による民族内差別

まず、濱田が「被害者の視点から語られる差別」と分類した民族内差別に注目しよう。ここに含まれる内容は、差別のあり方が比較的単純で、明確な差異化によって起きているという点で共通し

ている。具体的には、階層が高いか・低いか、アイヌとしての血筋が濃いか・薄いか、アイヌか・和人か、アイヌとしての仲間か・否か、という対立構造である。これらがアイヌの人々の間で差異化され、民族内差別を形成していく。

はじめに、第１のカテゴリーとして、「血の濃さによる差別」がある。血の濃さによって序列をつけるというパターンとしては、アイヌとしての血の濃い側から薄い側への差別と、逆に、血の薄い側から濃い側に対するものがある。これらはとくに明確なルールがあるわけではなく、その場その場で差異が作り出される傾向にあり、とくに子ども同士の間に見られるという（濱田 2012：162)。それゆえ、学校で起きるいじめの一形態として語られる内容が目立つ（佐々木 2014)。

≪濃い側から薄い側へ≫

・子ども同士でお互いによくわからないということもあって、同じアイヌであってもアイヌの血が薄いというだけで、同じアイヌの子を「アイヌ、アイヌ」といじめた。（札幌・老年・女性）
・アイヌの血の濃い人には、半分いじめるみたいな感じで、「おまえなんか和人の混血だべ」と言われる感じ。（伊達・青年・男性）

≪薄い側から濃い側へ≫

・アイヌの血を引いていても親がアイヌの文化に親しんでいなかったり、血が薄い子は、実際アイヌでもアイヌということをばかにする人もいた。そういう人たちは自分をアイヌだと思っていなかったり、アイヌであることの自覚が低かった。（白糠・青年・女性）
・和人と仲良くつきあっていたのは、自分は顔がアイヌに見えないからで、それで救われていたと思う。アイヌだとわかる外見の人がいじめられているところは小学校、中学校でけっこう目撃したことがある。ほかの人がいじめられて小さくなっているのは見たことがあり、先生がそれに対して何か言っているのは見たことがない。（新ひだか・青年・女性）

たしかに、いじめや差別が起きる場面では、基本的にそのときに少数の側がターゲットになりやすいため、明確なルールがあるとはいえない。

しかし、実際の経験ではなく、差別観が語られている事例に注目すると、血の薄い側から濃い側への言及が優勢である。以下は、それらの事例である。

・ちょっとでも薄い、うちと同じ感覚なら許せるけど、うちよりちょっと濃くなるとちょっとなって、やっぱりちょっと待ってよって言うと思う。だって見た目でみんな判断されてね、いじめられてきてるんだもの。ウタリだからって恥ずかしいっていうんじゃなくて、なんていうのかな、今までのなんかごたごたがさ、なんだろう、これ凄い良いイメージじゃないんだよね。（新ひだか・壮年・女性）
・俺自身は、子どもの頃からアイヌ顔もしてないから。うん。で、おふくろもどっちかっていったら比較的きれいな人だから。うん。町なんかでも、やっぱりほんとにアイヌってわかる、女の子なんか、店員なんかも使ってくれなかったって。お客来なくなるっつって。（新ひだか・老年・男性）
・アイヌの友達はいたが、アイヌの濃い人とは関わらなかった。友達にはなれたけども、一緒には

なりたくなかった。（白糠・壮年・男性）
・アイヌで本当に毛深い人はかわいそうだと思う時がある。（札幌・壮年・男性）
・悪いんですけど、アイヌの顔をしている子、誰もいないです。本人たちだってほとんど薄いからあまり。（伊達・壮年・女性）

どの対象者も、アイヌの血筋がさほど濃くないと自認している点で共通しており、それゆえ、アイヌとしての「外見」の濃い側に対するネガティブな気持ちが垣間見える。むかわ町からのみこうした差別観は語られていないが、世代、ジェンダーによる偏りはないといえる。

また、「外見」との関連で、かつてのアイヌ女性に特徴的な入れ墨の文化に言及する事例もある。

・入れ墨したばあさん。見て、恐ろしくて、恐ろしくて。（中略）私、だから、そんなの見たことない。うちのばあさん、そんなのしてないし。親戚のばあさんにも、そんなのいないからさ。怖かった、あれは。（新ひだか・老年・女性）
・曾祖母は口を黒く染めていた。小さい時、曾祖母か来ると顔を見てよく泣いていた。昔は長女だけが自分の血族の財産を守るために長女だとわかるように入れ墨をされたと聞いた。自分は長女なので昔に生まれなくてよかったと思った。入れ墨の文化だけは納得できない。（新ひだか・壮年・女性）

入れ墨の文化を怖がったり嫌がったりする内容も、見方によっては、民族内差別と捉えることが可能だろう。女性に特有な文化だからこそ、言及するのも女性のみとなっており、実際に入れ墨をした女性を見たことがある壮年層、老年層からの語りとなっている。こうした「外見」に言及する内容をふまえた場合、よりアイヌとしての外見的特徴を備えた濃い血筋のほうが差別されやすい現実がある。

血の濃さに関する差別のさらなるパターンとして、朝鮮人の血筋が混ざっている人への差別がある。

・母は朝鮮人とアイヌのハーフで、アイヌから「朝鮮アイヌ」って馬鹿にされたこともあったから、あんまりアイヌを好んでいなかった。世界で一番ひげの濃いアイヌと、世界で一番毛のない朝鮮人が一緒になると、毛のないアイヌになる。朝鮮人とのハーフにばっかり、アイヌのくせに毛がないという。アイヌがアイヌを馬鹿にする。（むかわ・壮年・男性）
・アイヌの一人だと自覚したきっかけは、結婚するときに、「アイヌ、朝鮮人、一番の貧乏」といって結婚を反対されたことだった。経済的な不平等が差別をつくり、その上にあるのが人種差別。差別が２段階、３段階になっている。（札幌・老年・男性）。
・「朝鮮、朝鮮」って言われてね。ここね、案外、アイヌっていうものを差別しないとこ。なぜかというとね、アイヌが多くいたから。たくさんいたから。朝鮮人は少なかった。朝鮮の混血とか。そうすると、そういう者をいじめるわけよ。（伊達・老年・男性）
・朝鮮人ということでアイヌの人にいじめられた。町に朝鮮事務所があって、そこに出入りしていると「朝鮮人」だと言われた。普通に遊んでいて、朝鮮のおじさんがたまたま来てわからない言

葉で話すと「何言ってるんだ。こいつら何話しているんだ」と言われた。和人の子とは普通に遊んだ。（新ひだか・壮年・女性）

・中学校の時に朝鮮系の人がいて（５人まではいなかったと思う）、その人たちがかなりいじめられたり、差別を受けたりしていた。アイヌが差別を受けていたということはなかった。（新ひだか・老年・男性）

２人目の男性が語るように、アイヌと朝鮮人の混血であり、貧困であることが重なると、「差別が２段階、３段階」となって降りかかってくる。老年層の彼は、朝鮮人の父親とアイヌの母親の子孫であるが、「生まれた頃の環境は日本人のアイヌに対する差別が激しく、アイヌの女性は朝鮮人と結婚するしかなかった。お互いに苦しい者同士が結婚したという事実がある」ということであった。近年ではオールド・カマーとしての朝鮮人との結婚はほぼ見られないため、「朝鮮アイヌ」に対する差別は過去のものになりつつある。

この男性の事例には、階層が低いか・高いかという第２のカテゴリー、「階層的差異による差別」が含まれる。この民族内差別は、貧しい人に対する差別だけでなく、経済的に豊かな人に対する違和感や感情的な反発も存在する（濱田 2012:161）。後者の事例として、「年に一度の文化祭で、様々な芸事を見せ、そのたびに衣装を替えていたら、周りからねたまれ嫌われてしまった」（白糠･老年･女性）というものがある。アイヌ民族の中で、経済的に豊かな人に対するねたみがあることがわかる。しかし、民族内差別の中で階層的差異に言及するものは最も少なく、語られるのは老年層が中心であり、青年層には存在しない。アイヌの人々は日本社会の中で相対的に低い階層であることが明らかにされているが（野崎 2012）、そのアイヌ社会内部での階層的な差異は見えにくくなっているといえるだろう。

続いて、アイヌか・和人か、アイヌとしての仲間か・否かという差異化、すなわち、第３と第４のカテゴリー、「和人に対する差別」と「アイヌ社会の閉鎖性」の検討に移ろう。

アイヌ社会では当然、アイヌの血筋であることが多数派であるため、その中で暮らす和人はアイヌ社会では少数派となる。それゆえ、アイヌ社会では非アイヌであることが差別の対象となり、「和人に対する差別」が起きることがある。そこでは「シャモのくせに」というように、「シャモ」という言葉に差別的な意味がこめられることが多い（濱田 2012：162-163）。また、濱田は、血の濃さによる民族内差別が主に子ども同士で見られるのに対して、和人に対する差別は、アイヌであることがお互いに明らかとなっている場面、すなわち、アイヌ協会などの活動の場において、大人の間で見られがちであると述べている。

・（アイヌ）相談員の認知度がすごく低くて、今でも覚えていますけど、あなたアイヌじゃないのになんでアイヌの相談員やってるのって。逆差別みたいな。（伊達・壮年・和人女性）

・結婚してアイヌ協会に入って、白糠のアイヌの人たちと関わるようになったが、最初は受け入れられている実感が持てず、「自分はアイヌではないのかな、ただ手伝っているだけなのかな」という気持ちが強かった。３～４年経ったら、やっと仲間として受け入れられ始めたと思う。（白糠･青年・和人女性）

アイヌであることが多数派となるアイヌ協会の活動においては、和人であることで露骨な差別を受けたり、和人である側が、アイヌの家族として協会での活動に加わることに思い悩む様子を見て取れる。上記の他にも、「協会に入っているが、離婚してから行事に参加しづらい」（むかわ･壮年･和人女性）、「（アイヌの）夫が亡くなった後、若い人にアイヌ文化保存会を抜けるべきではないかと言われた」（札幌・老年・和人女性）というふうに、和人女性からあげられる内容が目立つ。老年層を中心とした年長世代に偏っているのは、アイヌ協会での活動に、青年世代や壮年世代の多くが日常的にあまり関与していないため（上山 2012：188）と考えられる。

和人に対する差別に加え、「よそ者」が差別の対象となることもある。たとえば、アイヌ協会の支部において、特定の人のみが優遇される様子や、新しく入った人を排除するような雰囲気が例としてあげられる（濱田 2012：163）。他にも、「協会の仕事を仲間内で回すだけで、他のアイヌのことを考えていない」（札幌・壮年・男性）、「後から入ってきた人を受け入れてくれないような雰囲気がある」（むかわ・老年・女性）というように、アイヌ協会に対する不満はむかわ町、札幌市に多く、やはり壮年層以上の世代を中心にしている。新ひだか町、伊達市、白糠町においてあまり協会への不満が目立たないのは、この３つの地域におけるアイヌ協会への出入りが頻繁ではなく、安定的な活動だからではないかと考えられる。

以上､明確な差異化による民族内差別の実態を見てきた。現在では､階層的差異による差別や､「朝鮮アイヌ」というエスニック・マイノリティに対する差別は少なくなってきているといえる。和人や「よそ者」として差異化される差別は、アイヌ協会の構成員や活動のあり方が大きな影響を持っており、地域によって違いがあるものの、年長世代に偏りが見られる。唯一、血の濃さによる差別のうち、血筋の薄い側から濃い側への偏見は地域や世代、ジェンダーに関係なく把握できた。その際、血の濃さは「外見」に対する自分の価値観をもとにした差異化であり、その意味で、被害者の視点ではなく加害者の側から語られていると見ることができるだろう。

第２項　アイヌ・アイデンティティの両面性に見られる差別

続いて、民族内差別のもうひとつの側面、濱田によって「加害者の側から語られる民族内差別」と分類された残りの３つを検討していく。

まず、前項に続き第５のカテゴリーである「アイヌに対する否定的イメージの付与」という差別がある。これはアイヌ自身がアイヌに対する否定的なイメージを語るものであり（濱田 2012：158）、全体のうち最も多くのエピソードがあてはまっていることからもわかるように、民族内差別として幅広い概念である。

「アイヌ民族」全般に向けた否定的イメージは以下のように語られる。

・当時のアイヌの方のイメージとしては、着るもの、家の中がだらしないと思っていた。父はよくアイヌを馬鹿にするとき「うちの中が汚くて、格好が汚くて、自分でもいいから髪の毛くらい切れるのに、そういうだらしないのがアイヌだ」と言っていた。飲み会の時のだらしない姿もすごく嫌だった。（白糠・壮年・男性）
・小さい頃に、アイヌ民族は汚いというイメージがあった。むかわのお祭りで酔っ払ってふらふらしている人がいて、だらしないイメージが残っている。酔っ払って倒れて救急車で運ばれている

アイヌの人はかっこ悪いと思う。（むかわ・青年・男性）

・上の年代の人を見ると、みんな酒癖が悪く、アルコール中毒の人や無職の人が多いなと思っている。「だめになっている人が多いのかな」と受けとめており、その理由としては「自分がアイヌだから」と考えているせいではないかと考えている。（札幌・青年・女性）

・祖父は、“自分はアイヌだが、アイヌが嫌い”という人だった。「アイヌはアイヌをだますから嫌いだ」と言っていた。身近でそのような経験をしたらしい。だから、存命中はお祭りにも参加せず、祖母が参加することも良く思わなかった。（白糠・青年・女性）

以上の語りは、青年層と壮年層からのものであり、青年世代を中心とした若い世代に偏りが見られる。ただし、「母」や「父」や「祖父」がアイヌを嫌ったり馬鹿にしたりしていたという事例が散見されるように、年長世代からアイヌに対する否定的イメージが引き継がれる様子が見てとれる。

上記以外にも、「周囲のアイヌの姿を見て、アイヌは良いものではないと感じるようになった」（札幌・壮年・男性）、「子どもたちには見せたくないようなアイヌの無様な姿はある」（むかわ・壮年・男性）など、客観的に「アイヌ民族」を捉え、否定的なイメージを持っている人は一定数存在する。

こうした否定的なイメージは、アイヌの人との結婚は避けたいという具体的な意識にも発展していくことがある。前節では和人男性がアイヌ女性との結婚を回避したがる事例に注目したが、アイヌ民族同士でもこうした様子は見られる。

・アイヌのおばあちゃんたちに「シャモと結婚するんだよ」とよく言われた。「アイヌ同士で結婚すると生まれてくる子どもがかわいそうだ」とも言われた。小さい頃から言われて育ったので、物心ついたときには毛深い人とは結婚しないと思っていた。見た目でアイヌに見える人は嫌だと思った。（札幌・壮年・女性）

・子どもに苦労をさせたくないので、できればアイヌの人と結婚したくないと思っていた。（新ひだか・老年・女性）

・アイヌの人とは結婚したくないと思っていた。子どもに濃い血筋が出たら嫌なので、付き合いをするときにも和人を選ぶようにしていた。（新ひだか・青年・女性）

上記はすべて女性の語りであるが、男性の側からアイヌ女性との結婚を避けたいと語られる例ももちろんある。しかし、菊地（2013）でも述べているように、年長世代から和人と結婚するように教え込まれ、自らの意識となっているケースはアイヌ女性に特有である。また、子どもへの血筋の影響を考慮し、アイヌとの結婚を避けたいという意識をもつ様子も、やはり実際に出産する女性の側からのみ語られる。こうしたことから、民族内差別のうち、恋愛や結婚、出産にかかわる内容はアイヌ女性に特有のものと見てよいだろう。

さらに、アイヌに対する否定的なイメージは、自分自身にさえ向けられることがある。

たとえば以下の女性は、自分のアイヌの特徴を備えた風貌を「スティグマ」として捉えている。

・「母さんと父さんの子に生まれたから、私こんなにみったくなく、毛深く生まれた」って言ったんだそうだ。兄貴たちは言わなかったのに、お前はそういったのに、っていうのが頭にあって、

いや、申し訳ないことを言っちまったんだもんだ。（新ひだか・壮年・女性）

彼女は、「肌から差別されたり、軽蔑されたりするのは嫌だから、絶対アイヌの人としか結婚しない」という気持ちや、和人と結婚しないのではなく「できない」というふうにも語っている。この事例を含めると、ここまでの検討において、アイヌの人々が恋愛や結婚を考える際に２通りのパターンがあることがわかる。１つは、先に見たように、子どもへの血筋の影響を憂慮して、アイヌ同士ではなく和人と結婚する（したい）という生き方であり、もう１つは、逆に、本当は和人と結婚したいという気持ちもあるのかもしれないが、自分に自信が持てなかったり、差別を恐れたりして自分と同じアイヌとの結婚を選択するという生き方である。後者の、自分自身を卑下するこうした様相は、女性にのみ見られる生き方である。

以上のようなアイヌに対する否定的なイメージは、アイヌであることを公表しないという生き方をも導いていく。これが第６の「アイヌ性の隠蔽」というカテゴリーとなる。前節での民族差別の分析（第２節第１項）において、アイヌであることを隠して生きる女性たちの姿を確認した。それらは、和人からの差別を回避するための隠蔽であったが、アイヌ社会の中においてアイヌ性を隠蔽する場合、よりアイヌらしい「外見」の人を差異化し、差別の対象者をつくりだすという構造の一翼を担ってしまう可能性がある（濱田 2012：164）。

・以前、生命保険会社で働いていたときに、同じ職員の夫が濃いアイヌの血が入っていて見るからにアイヌとわかるタイプだった。リーダーがその人の夫のことをちょっと差別的な口調で「本当のアイヌだからね」みたいな会話をしたときに、自分がアイヌであることを言い出せなかった。（むかわ・壮年・女性）

つまりここにも、「外見」を判断材料とした民族内差別が見てとれる。その際、上記の差異化の場合は、よりアイヌらしい「外見」の人を差異化するという意味で、加害者の立場からの民族内差別といえる。他方、単純に加害者の立場からと言い切れないのが、アイヌ・アイデンティティを持つ自らを卑下するような場合である。たとえば、親から子どもに対する血筋の告知を躊躇するようなことがある。わが子への血筋の告知は「避けている」、「自分のほうから子どもに伝えるというのは、今でも難しい」（新ひだか・壮年・男性）という事例（菊地 2013：48）は、親がアイヌ民族に対する否定的なイメージを持っているからこそ、告知によって子どもがアイヌというエスニック・アイデンティティを「スティグマ」として捉えてしまうのではないかという憂慮が潜んでいる。そしてそれゆえ、アイヌであることを伝えられずにいる。アイヌ性の隠蔽は、親子関係に注目した場合、うかつに差別を再生産しないための方法のひとつであると捉えられる。

最後に、第７のカテゴリーとして「自己責任論」がある。これは、アイヌに対する否定的なイメージを肯定した上で、アイヌ民族が置かれた状況を個々の能力や態度に求めるような事例である（濱田 2012：158）。濱田は、アイヌ内部で差別された経験をもつ対象者らが、周囲のアイヌに対して、厳しい評価や自己責任を指摘する事例を取り上げている。過去に民族内差別を受けたという経験や感覚が自己の正当性を高め、自らと他のアイヌ、あるいはアイヌ全体を差異化するという状況である（濱田 2012：166-167）。こうした過去の経験にもとづいた上での自己責任論を語る事例は多くな

いが、以下の老年男性にもうかがえる。

・今のアイヌは甘えていると思う。今はアイヌの人たちは、昔のような差別されて学校にも行けないといった状況ではない。アイヌだからといって制度利用だけをもくろんでいるようでは、いつまでも馬鹿にされるし、尊敬してもらえない。自立する努力をするべき。（白糠・老年・男性）

年長世代の場合、過去のアイヌ民族が置かれた状況と比べて、現代アイヌに対する意見を形成しやすいといえるだろう。一方、若い世代には、アイヌ・アイデンティティと距離をとった上での自己責任論と捉えられる語りがないわけではない。たとえば、「自らアイヌだと主張する人は、ずるい人が多い」、「自分から（アイヌ協会に）加入しようとは思わない。その援助を受けたいとも思わない」（白糠・青年・男性）という意見がある。また、「アイヌであることを気にする人がいるが、なぜそこまで気にするのかと思う」（むかわ・青年・男性）、「アイヌという言葉を自ら差別的だと思っている方がおかしい」（むかわ･青年･男性）というように、アイヌであることには依拠せずに、個人の責任を重視する事例が目立つ。

しかしその際に「問題」となってくるのは、以下のような考え方である。

・やっぱりその血が濃いとか薄いとかって、顔を見るとわかるんですけど、ちょっとひどいというか、ちょっと濃いめの人はそういうふうに。いじめというか。結果的に、アイヌというそのものに対していじめられてたわけではないんですね。やっぱり外見だったり、ちょっと性格が少し変わってたりして、アイヌだからというのではないと思うんですよ。（新ひだか・青年・男性）

上記の事例には、アイヌとしての血が濃い人に差別が起きた場合、「アイヌというそのもの」に対してではなく、「外見」が自己責任として位置づけられている。濱田も指摘していることだが、アイヌの人々の間でエスニック・アイデンティティが相対的に低くなってくると、「アイヌ民族」の個人化（濱田 2012：168）が進行し、結果として民族内外における差別が助長されることになる可能性もある。

第４節　まとめと考察

以上、本章では現代アイヌに見られる民族差別と民族内差別について、５つの地域を総合して検討してきた。これまでの分析を改めて振り返ると、以下のようになる。

まず、民族差別に関しては、差別がおきやすい３つの場面についての量的把握を試みたところ、学校で起きる差別、恋愛や結婚の際の差別、就職時や職場での差別の順で、被差別エピソードが多いことがわかった。学校での差別はどの地域でも、どの世代でもまんべんなく経験されているが、その被差別経験が原因となって進学意欲を削がれている事例もあり、差別がアイヌの人々のライフ・チャンスを狭めているという意味では深刻である。恋愛や結婚においては、アイヌ男性より女性のほうが不利益を被りがちであった。とくに新ひだか町、白糠町で顕著に見られたように、和人の側があからさまにアイヌとの結婚を避けることもあり、和人との恋愛や結婚を成就させるために、並大抵ではない苦労を経験している人もいる。そして、就職における差別は札幌市でやや目立ってい

たが全体としては少なく、しかしこうした数の少なさは、“アイヌ労働市場”が存在しているからと考えられた。就職の時点でアイヌが多く従事する仕事に水路付けられている可能性があり、職場で差別が起きないのではなく、和人とアイヌの職場の住み分けがなされていると考えられた。なお、アイヌ女性はいわゆる“水商売”につく事例が多く、職場においてもアイヌ男性より女性の被差別が多い。

以上のように、アイヌの人々の生活史の中には、被差別経験が拭いがたく刻まれており、とくに男性よりもアイヌ女性が被る不利益・不公平が多い。白糠町のように、どの世代も半数以上が被差別経験の持ち主で、老年層にいたっては100％の経験率という地域も存在する。

しかし、アイヌの人々の未来を展望すると、民族差別は時代を経るごとに軽減していく可能性がある。なぜなら、全体的に若い世代ほど被差別経験は減少しているからであり、今後、社会の中でアイヌと和人の混血がますます進んでいくことをふまえれば、いずれはアイヌに対する差別が消失する可能性もあるかもしれない。

ただし、こうしたなかで現在、そしてこの先も考慮しなければならないのは、民族内差別の状況である。混血が進む現在は、誰がアイヌかということが見えにくくなっている。それは和人が多数派である日本社会全体ではいっそう進行していくと考えられるが、アイヌ社会に限ると、誰がアイヌかということはいまだに認知しやすい面がある。もちろん、民族内差別のうち階層的差異によるものやオールド・カマーとの混血によるエスニック・マイノリティに対するものは今の時代では影を潜めつつある。また、地域によってはアイヌ協会の活動を通して、和人やよそ者が排除される様子が見られるものの、若い世代はこうした活動に積極的ではなく、むしろアイヌ･アイデンティティとも距離をとりがちである。

しかし若い世代も含めて現在に残存するのは、アイヌ民族の内部でお互いに差異化しあったり、その過程で劣位に置かれてしまう結果、自らのアイヌ・アイデンティティを否定的に捉えたりするという民族内差別である。より深刻なのは、血の濃さにもとづいて、お互いに差異化しあうという民族内差別である。その際、血が濃いか･薄いかという判断はほとんどが「外見」を頼りになされ、アイヌの血筋として薄い側が、よりアイヌらしい「外見」を備える濃い側への偏見を語ることが典型となっている。アイヌ同士で濃い血筋のアイヌとは結婚したくないという結婚差別も存在する。その際にも、アイヌ男性より女性のほうがより不利益を被りがちである。

このように、血の濃さによる差異化によって加害者の視点から語られる民族内差別が目立つ反面、差別される側の論理となる被害者の立場から語られる民族内差別もある。ここには、自らのアイヌ･アイデンティティを「スティグマ」と捉え、和人ばかりでなくアイヌ民族内部でも自信を持てないでいる人々も該当する。それゆえ、民族内でもアイヌ性を隠蔽したり、親子間でも親が子どもにアイヌであることを告知できないでいたりする事例があった。

以上のように、主としてかつて和人とアイヌの人々との間で見られたアイヌに対する民族差別が、アイヌ社会の内側で民族内差別として、血の濃さにもとづいて同じように繰り返されている現実がある。このままアイヌ社会の内部で「加害者」と「被害者」とが相容れない状況が進行していくと、アイヌであることもまるで自己責任のように片付けられてしまい、劣位に追いやられる側には「救い」がない。こうした現実を変えるにはどうしたらよいのか。１つには、混血によって「アイヌ民族」が多様になってきていることにアイヌ自身が向き合い、アイヌ民族内部で相互理解を深めてい

く可能性があるだろう。アイヌ民族で組織されるアイヌ協会は、その役目を考え直す必要があるかもしれない。そしてその意味で、もう１つには、アイヌ協会がアイヌの血筋にこだわらない組織として再編成される可能性もあるだろう。新たな「組織」を立ち上げるよりも、アイヌ協会がその役目を担うことが現実的といえるのではないだろうか。

注

1）したがって、インタビューの中で被差別を感じさせるエピソードがあっても、本人がアイヌであることを理由とした差別を受けたことは「ない」と断言するような場合、被差別経験を持つ者としてはカウントしていない。また、インタビューは半構造化面接法で行われたので、この質問以外の場所で、話の流れの中で差別されたことがあると語られている場合には「あり」にカウントしている。

2）インタビューでは、「結婚・恋愛をするときに（未婚の場合は「結婚・恋愛を考えたとき」）、民族性を考慮した・されたことはありましたか。ある場合、それはどのようなことでしたか」という聞き方をした。したがって、民族性を考慮された場合が被差別となる。

3）さらに「その他」として本稿では取り上げなかった事例として、日常の「まなざし（目で）の差別」、義務教育以前の「保育所」でのエピソード等が含まれる。順に、菊地（2014:122）、佐々木（2015：79）を参照。

4）特定を避けるため、市町名以下の字、集落の具体名に関しては匿名α、β、γ…を用いた。

参考文献

濱田国佑 , 2012,「アイヌ社会における差別の問題――生活史から見る民族内差別」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 157-168.

菊地千夏 , 2012,「アイヌの人々への差別の諸相――生活史に刻まれた差別の実態」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 143-156.

――――, 2013,「アイヌ差別の諸相――民族差別と民族内差別」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 30　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 38-50.

――――, 2014,「アイヌであることと被差別経験」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 31　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 116-130.

松本和良・石郷岡泰・太田博雄 , 1995,「現代ウタリ社会と差別・偏見　浦河町の社会調査を中心として」『ソシオロジカ』20（2）, 1-47.

西田菜々絵・小内透 , 2015,「アイヌ民族の初職と職歴」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33　白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学

研究室 , 49-64.
野崎剛毅 , 2012,「階層形成過程と階層分化の要因――階層形成過程としての生活史」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 95-108.
小野寺理佳 , 2012,「アイヌとジェンダー」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 61-93.
大黒正伸 , 1997,「ウタリ社会における文化葛藤の問題―伊達市の社会調査から―」『ソシオロジカ』22（1）, 71-108.
――――, 1998,「ウタリ社会と文化的記憶の葛藤―伊達市の社会調査―」松本和良・大黒正伸『ウタリ社会と福祉コミュニティ』学文社 , 162-199.
佐々木千夏，2015,「繰り返されるアイヌ差別」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33　白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 65-82.
上山浩次郎 , 2012,「エスニックな社会運動への参加と意識―アイヌ協会がもつ生活上の意味―」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 183-193.

（佐々木千夏）